

吉田知子の文学における〈糞〉と〈幽霊〉 —「終りのない夜」「引揚者収容所」「恩珠」を中心に—

長嶋 皓太

要旨

本稿は、吉田知子（1934-）のテキストに頻出する〈汚物・糞〉及び〈幽霊〉のテーマに着目することで、「引揚げ」が必ずしも直接的に描かれない吉田のテキストが、記憶の問題を扱うことを介して歴史へと投げかける批評性を明らかにする。まず、「終わりのない夜」（1968 年）と「引揚者収容所」（1972 年）を見ることで〈汚物・糞〉及び〈幽霊〉の意味や小説中における機能を確認する。吉田の小説において両者は強い結びつきを持つ。次に、吉田の「引揚げ」体験が直接的に記述されたテキストとして「今も傷口はふさがっていない」（1983 年）を取り上げ、歴史的な観点から〈汚物・糞〉を照射する。続いて、「引揚げ」の問題と切り離せない「いるべき場所のなさ」と言うべき主題が、〈幽霊〉のテーマへと連続していくことを「幽霊の弁」（1990 年）などの分析によって論じる。〈汚物・糞〉と〈幽霊〉は、抑圧された記憶との結びつきを通して国民国家への批判を投げかける。最後に、〈汚物・糞〉と〈幽霊〉のテーマが見出せる 90 年代の代表的なテキストとして、「恩珠」（1996 年）の分析を行い、忘却された記憶や暴力を告発する同作の側面を明らかにする。

キーワード：吉田知子，汚物・糞，幽霊，「引揚げ」，「終りのない夜」，「恩珠」

1. 実験小説と「引揚げ」を繋ぐ鍵概念としての〈汚物・糞〉、〈幽霊〉

吉田知子（1934-）は静岡県浜松市に生まれ、軍人であった父の都合で大阪、名古屋、満州三河ナラムト、金沢、満州公主嶺を転々と移動し、敗戦は樺太豊原市（現ユジノサハリンスク）で迎えた。絶えざる移動と帝国植民地での暮らしを体験した吉田は「引揚げ」後も浜松市引佐町奥山で住居を転々とする。十代後半から濫読と創作へと向かい、60 年代には浜松市民文芸への寄稿を行う。また配偶者の吉良任市（1927-2009）らとともに立ち上げた文芸同人誌『ゴム』での精力的な作品発表を展開した。文学の既成概念に捉われない創作を志した『ゴム』の方針は、70 年代以降の吉田の主だった作品にも底流しており、多様なテキストを発表してきたにもかかわらず、吉田の創作態度には一貫性があると言える¹。このことと吉田の経歴をあわせて考えようとするとき、実験的とさえ言える小説群に、必ずしも「引揚げ」に関わる記述あるいは表象が見られないことは、かえって重要に思われる。本稿では吉田の小説にしばしば見られるテーマとして〈汚物〉ないし〈糞〉と〈幽霊〉に着目し、それらが未了の問題を突きつけ、あるいは忘却された記憶を再来させること、また（時に「日本人」としての）自己同一性を解体することを論じる。小説中において〈汚物・糞〉は未消化物や心的な負債と関連し、済んだことにして忘れてしまいたい何か、気がかりなもの・ことを喚起する。同時にそれらは、自己の内部と外部の境界を動揺させる内なる（あるいは無意識下の）他者の形象化として考えることができる。一方〈幽霊〉は、抑圧された過去や罪障の意識と結びつき、ひとたび現れる

とこちらに何事かを要求し、不都合な記憶を呼び覚ます厄介な存在である。問題が未了である限り〈幽霊〉ないし〈幽霊〉的な主体は「いるべき場所のなさ」を抱えたまま終わりのない彷徨を続けるしかない。〈汚物・糞〉と〈幽霊〉は、どちらも未了のまま捨て置かれあるいは封印された記憶や出来事と関連する。本稿で取り上げる吉田の小説では、両者は結びついて機能している。本稿では加えて、〈汚物・糞〉及び〈幽霊〉を考える上で示唆的な、「引揚げ」体験に関わる吉田のエッセイを取り上げる。これらのテーマが吉田の小説群と「引揚げ」体験とを接続する上で重要になることを確認したい。いまだ研究や批評の多くない吉田のテキストを歴史的事象へ接続する一步として、頻出するテーマに着目しその特性を明らかにすることは有用であろう。

以下、本稿では〈汚物・糞〉及び〈幽霊〉の見られる吉田のテキストを見、それらのテーマが、「引揚げ」体験の記憶と実験的な小説テキストを繋ぐ鍵概念となることを確かめる。「終りのない夜」（1968年、文芸同人誌『ゴム』10号）をはじめに取り上げ、言語表現に着目した精神分析の知見に依りながら、他のテキストへと連続する鍵概念として〈汚物・糞〉を抽出し、さらに分身の〈幽霊〉性を確かめる。

次に見る「引揚げ者収容所」にも〈汚物・糞〉が頻出する。「引揚げ」における移動、抑留、あるいは逃避行において排泄が差し迫った問題であったことを論じる。同作において〈汚物・糞〉は、「引揚げ者」たちが置かれた過酷な環境を示す指標であると同時に、自己と他者の内部／外部の境界を曖昧にし、自明に思われる自己同一性を動揺させる機能を持つ。他方、話者「私」が語りかける〈幽霊〉は「私」を非難し、いつまでもいなくなるならない。〈幽霊〉が攪乱するのは現在／過去、現実／非現実、生／死の境界である。〈汚物・糞〉と〈幽霊〉とは、ともに「私」に働きかけ、変容を迫る。

次に見るのは、吉田の「引揚げ」体験が直接的に記述されたテキスト「今も傷口はふさがっていない」（1983年3月25日『朝日ジャーナル』）である。そもそも「引揚げ」とは、植民地に移住した人々を敗戦時に送還することを意味した²。「引揚げ」という言葉は「いるべき場所」としての祖国を作り出す政治的なものである。敗戦後、国家は植民地にいた移民たちを「内地」と呼ばれていた領土内へと引き受け、再度「国民」として回収する必要があった。そのことを検討した上で、「引揚げ」者である吉田にとっては国家が必ずしも「いるべき場所」だとは考えられなかったことを、また国家が「国民」を想像させ＝創造するために使用する「同胞」という概念が、吉田のテキストにおいて自明のものとして語られてはいないことを確認したい。吉田にとって「引揚げ」は、「いるべき場所」である国家に自らが「同胞」として迎え入れられた体験ではない。むしろ厄介者・余計者といった自己認識を深く刻み込まれた体験——「傷口」あるいは「傷」——ですらある。

以上述べてきた中で、「いるべき場所のなさ」は「引揚げ」のありようを示唆するテーマであり、〈幽霊〉へと連続する。吉田の文学には、「いるべき場所のなさ」を抱えた人物が現れ、あるいは語る。その際問題になるのは自らの来歴あるいは過去の出来事である。彼女／彼らの多くは自己画定の困難さを抱えて語り出し、自己同一性の危機に直面する。そして終わりのない彷徨へと向かっていく（「無明長夜」（1970年、『新潮』4月号）はその典型例である）。本稿でそのような話者を「幽霊」と呼ぶことは、吉田のエッセイ「幽霊の弁」（1990年2月25日『東京新聞』）を介して可能となるだろう。いるのにいない者とされる「幽霊」には「いるべき場所」などなく、よって「いてはならないところ」（「無明長夜」）に現れるか、あてどなく歩き続けるしかない。「幽霊」とは「いるべき場所」ではないところへ出現する厄介者であり、余計者であるが、同時にその出現によって現世の人間たちに何かを訴えるものでもある。

近年に至るまで、吉田のテキストには〈汚物・糞〉と〈幽霊〉がたびたび現れる。両者はその余計者・厄介者のな性格において類似し、また吉田の文学においては関連して機能する。それらは「臭いものには蓋」とばかりに都合よく忘却された記憶を喚起し、あるいは自明視される自己を転覆し宙吊りにしてしまう。ともに、こちら側の規範や境界を問いに付す存在だと言える。本論では最後に〈汚物・糞〉と〈幽霊〉とが結びつくテキストとして「恩珠」（1996年）を取り上げ、同作が忘却された暴力を告発していることを論じる。〈汚物・糞〉や〈幽霊〉のテーマに目を向けた時、吉田の文学が国家に捨てられた「引揚者」の「棄民」性のみならず、「日本人」が「日本人ではない」他者へと向けた暴力をも問題化していることが明らかになる。

以下、具体的な作品を分析対象として〈汚物・糞〉〈幽霊〉がいかに機能しているかを論じ、両者の結びつきを確認したい。

2.1. 「終りのない夜」における負債＝分身＝「ウンコ」

「終りのない夜」（1968年）は『ゴム』10号に発表されたのち、同人誌推薦作として『文学界』7月号に転載され『無明長夜』（新潮社、1970年）に収録された。本稿の分析には初出のテキストを用いる。

「気がついたとき、私は歩いていた。いつから歩いていたのか」と語り出される同作は、理由のわからない彷徨をあてどなく続ける「私」を話者とする小説である。「私」は場所も時間もわからない「夜」を歩いている。コートのポケットを探ると紙幣がある。「その柔らかいような硬いような感触が気持ちよかった」。歩いていると足にねばねばした物がはねて取れなくなる。やがて異様な風貌の「老婆」に出くわす。「老婆」が「私」をつかむ手は力強く、ふりほどけない。その上冷たくぬるぬるしており、「しつこい嫌な感じ」がする。さらに「老婆」は自分のことを「私」だと言い張るのである。「とにかくあんたは私。それだけのことよ」。老婆が「五万や十万」どころではない金をかけて移植したという「本物」の歯は、「便所のタイル色に輝いている」。歩き続けるうち、老婆は少しずつ若返ってくる。「老婆」の首には、「噴火口のよう」な汚らしい傷がある。「老婆」とともに歩く「私」は「[この老婆は私だ]」と思い始める。そう考えると「猛烈に腹が立って老婆を突き飛ばし」もする。

「あんたなんか、私と何の関係もないんだよね。もともと」と私はやっとな笑い止んで言った。今や私の方が優勢だった。私は勝つところだった。「たとえ、あんたが私の未来だとしても、それが何だっていうの。やっぱり関係なんかないでしょ。あんたは余分にすぎないわ」

老婆は震えだした。

「お前なんか、私の捨てた過去なんだ。ふん、どだいあんたは、もう捨てられてるんだからね。

ハナ
最初っからさ。マ・マ……さあ、もういいよ。もうわかったから消えておしまい。お前みたいな
みっともないもの、いやらしいもの、間違い……今すぐ直ちに死んでしまうといいんだ。自分で
首でもくくってさ」

老婆が興奮して吃りだすのを私は見ていた。それから冷静にやさしく教えてやった。

「まあ、かわいそうだね。あんた、私が死ぬと自分がどうなるか忘れたの。だって、あんたは私の未来なんでしょう。だから私はあんたがいなくてもいいけど、あんたは私なしには存在

できないのよ。**ははあん**」と私はできる限りの大声で嘲笑した。「**あんたは私のウンコだよ**」

引用末部の「ウンコ」を俟つまでもなく、「終りのない夜」には「ウンコ」的なモチーフが充満している。吉田の文学における〈汚物・糞〉を考える上で、まず本作における「ウンコ」の特徴を確認しておきたい。小説の冒頭部と結末部で「紙幣」が引き合いに出されることは意味深長である。「私」の未来であるところの「老婆」は、多額の金をかけて「本物」の歯を移植したが、その歯は「便所のタイル色」に見える。「金」は換喩的に「便所」へと接続され、糞と結びつけられている。フロイトは「性格と肛門愛」(1905)で「糞」と「金」の関係に言及している。フロイトによれば、几帳面、儉約、強情といった肛門性格は、幼児期の肛門性愛の実践(快感を得るための大便の我慢など)と結びついており、「欲動の継続」肛門性愛の「昇華」または「反動形成」のいずれかの結果であるという。

金銭利害についてのコンプレクスと排便コンプレクスは、見たところまったく異質なようであるが、じつはこの二つを結ぶ関係は、じつにいたるところに溢れている。〔中略〕じっさい、いにしえの文化、神話、童話、迷信、無意識的思考、夢、そして神経症など、太古の思考法が支配的であったところ、ないし今なおそうありつづけているところでは、いたるところで、金銭と糞とのきわめて密接なつながりが見出せるからである。たとえば、よく知られているように、悪魔が情婦たちに贈る金貨は、悪魔が立ち去ったあと糞に変わる——まこと悪魔というのは、ほかでもない、抑圧された無意識的な欲動生活の擬人化された姿なのである。〔中略〕

もしかしたら、人間が知ったもつとも価値あるものと、人間が屑(refuse)として捨て去るもつとも無価値なものとの対立が、金貨と糞便とのこの限定的同一化を引き起こすことになったのかもしれない。³

すなわち、もつとも価値あるものである「金」と、無価値な「屑」や「糞」を両極として捉える認識が、価値転倒を引き起こすのではないかという考察である。「金」と「糞」が垂直にヒエラルキーを形成し、その認識が無意識化されたのち、「金」と「糞」の対立関係が水平に誤認されること。そこにおいて「限定的同一化」がメトニミカルに引き起こされ、「糞」による価値転倒へ至る、というのがフロイトの説であろう。「糞」が何らかの抑圧されたものの回帰であるとすれば、常識的なヒエラルキーを転覆させかねない「糞」の出現は、攻撃性を帯びたものとなり、哄笑を引き起こす契機を生む。「終りのない夜」においては、「私」の存在を脅かした「老婆」＝未来の「私」を、「私」が自らの「ウンコ」だと喝破することによって、「糞」的な存在に対する「私」の反応としての哄笑が生じる。しかしその直後、「私」は「老婆」の穢らしい「傷口」へとめり込み、その中へと落ちる。そこにはまた「終りのない夜」が続いており、「私」は歩き出さねばならない。この結末は、「糞」と「私」の結合として考えられる。「私」の未来である「老婆」を「ウンコ」だと名指すことは、自らの「終りのない」彷徨の行き着く先が「ウンコ」であることを認めることにほかならないからだ。「ウンコ」は常に背後に放たれる排泄物であると同時に、「終りのない」彷徨を続ける限り、すなわち生き続ける限り、未来において生産され続けるものでもある。その意味で「ウンコ」の精算が済むことは決してない。「ウンコ」は汚らしい過去の遺物であると同時に、未来における生産物とも言える。「私」が認識しうる最も価値ある存在とは、ポケットの「紙幣」によって維持すべき「私」自身であ

るが、その未来に無限に「ウンコ」があるならば、「私」と「ウンコ」＝未来の対立において、価値転倒が起きるのも不思議ではない。すなわち、「ウンコ」は「私」で、「私」は「ウンコ」なのだという認識が、「終りのない夜」の結末にはある。

「ウンコ」が含意するのはそれだけではない。〈分身〉としての〈糞〉、という問題もまた「終りのない夜」に見られたはずである。ここで、北山修の論考を見たい。北山は、日本語における身体の比喩から人間の心の成長過程や成長の様相を捉えることを試みている。比喩の例としては、「腹が立つ」「すまない」「くだらない」「しまりが悪い」「糞食らえ」「やけくそ」などが挙げられる。割り切れない出来事、消化できないこと、すまない（済まない／澄まない）ことは、主体にとって心的負債と呼ぶものとなり無意識に経験される。

たとえ逃げようとしてももともと自分から出た未消化物であり、これをまた誰かに片づけてもらうなら負債はさらに増え、きちんと始末しないなら自分にくっついて追いかけてくることになる。未消化物の性格である粘着性のために、取り除けない感じは、「ねばねば」「ベタベタ」という表現で適切に描写される。〔中略〕精神分析では世界各国でそれが実践に移されたときから、未消化物の逆襲と被害的不安との結びつきの可能性を示唆してきている。その本格的な報告としては、ヨーロッパ系の分析家、ステルケ（A.Stärcke）とヴァン・オフイセン（van Ophuijsen）の一九二〇年のものが最初である。まずステルケは、フロイトが「脇に押しつけておいたもの（das Verdrängte）」の逆襲が迫害的な不安を形成することを示唆したことから出発して、被害妄想では、対象が排泄物と同一視されていることを発見した。同様にヴァン・オフイセンは、これが迫害（persecutor）と等価なものとなって、後ろから攻撃されるという被害感情が生まれると説いた。これらの解釈では、妄想のなかの加害者は本人の排泄物の擬人化なのである。さらに、つねにその対象には〈どっちつかず〉の感情が向けられていて、だからこそ対象は排泄物の受け皿にされながらも、完全には切り離されないでいるのであろう。つまり、嫌悪されてもついてまわるのは、どこかでそれが求められているからである。⁴

「ベタベタ」と「くっついて」「追いかけてくる」迫害者像は、「終りのない夜」における「老婆」＝未来の「私」＝「ウンコ」の在りようを言い当てている。しかし「終りのない夜」の「私」が暗に自らを「ウンコ」と認めていることは、北山の論考に収まらない点であろう。認めるが故に「老婆」＝「ウンコ」と「私」は接近し、結合を遂げることになる。

2.2. 「終りのない夜」における〈幽霊〉

同作における〈幽霊〉のテーマは、「老婆」の分身的な性格に着目することで明らかになる。幽霊とはいわば、いるのにいないモノ、いないのにいるモノである。「私」は「老婆」の幽霊的な性格に気づいている。「老婆はいるのだが、いなかった。いないのに、その、いないものが、わずらわしく不快だった」。化け物じみた姿に変貌して行くかと思えば若くも見え、「少女」にすら変じる「老婆」は、「私」のドッペルゲンガーであり、本来存在してはならないモノである。「私」の背中に「重い生暖かいもの」として「べたりとはりつ」いてくる「老婆」は、「私」に歩き続けることを要求する。不意に現れ「私」の分身であることを主張する、穢い傷口を持った「老婆」、「私」は「余分にすぎない」モノであるところのその「老婆」＝分身を殺めようとするが、失敗し「終りのない夜」を繰り返

す。この結末に至って〈幽霊〉的なのは、何よりも「私」自身である。「老婆」と「私」との境界は（「老婆」の糞便＝分身的な性格によって）あやふやになり、結局「私」は居場所のないまま彷徨を続けることになるからだ。「私」の糞便＝分身であることによって「老婆」は〈いるのにいないモノ〉としての性質を「私」にも付与し、〈幽霊〉的な彷徨へと差し向ける。〈汚物・糞〉と〈幽霊〉は、ともに未了の問題を主体に突きつける厄介なもの・余分なものとしての性質を持っている。それらは自身の存在を主張し、何かを要求することで、「私」という存在の不安定さを暴き出す。両者は、「私」を未了の問題へと駆り立て、あるいはそれに目を向けることを要求する。

「終りのない夜」を離れて、吉田の文学全体へと目を向けた時、〈汚物・糞〉あるいは「ウンコ」の問題は、初期作品で済む／澄むものではなかったことが諒解される。「海辺の家」（1974年、『文藝』2月号）では、住居を転々としながら「台所用品」を売っている「彼女」がある時越してきた部屋に、ある日「茶色の紙で包んだ長さ三十センチほどのもの」が置かれる。包には黒いシミが滲み出し、異臭を放っている。中身は明示されないが、おそらく死んだ魚か糞便の類だろう。すぐに家の外に捨てた「彼女」だが、その「包み」のことは頭を去らず、自ら拾って来てしまう。「それは思いがけない人からの思いがけない贈りものに違いない」と「彼女」は思う。贈与＝負債としての〈汚物・糞〉の性格が見て取れる。「日本難民」（2002年、『新潮』10月号）の話者「私」は、逃避行の末自らの垢や吐瀉物にまみれ生死のあやふやな境位を彷徨う。「ウンコ国ウンコ村」（2019年、文芸同人誌『バル』第6号）では、排泄が出産と並んで重要視される社会が描かれる。このように、〈汚物・糞〉、あるいは「ウンコ」は初期から近年まで吉田の文学につき纏う。吉田の文学にとって「ウンコ」は、いつまでも済む／澄むことのない未了のテーマだと考えられる。そのことと「引揚げ」体験や戦時の記憶は、吉田のテキストを介して結びつく。そして、居場所のなさや訴える話者やそのあてどない彷徨、また忘却された記憶を再来させる他者といったモチーフが繰り返し描かれる吉田のテキストには、〈幽霊〉の問題もついてまわるのである。次節では、〈汚物・糞〉のテーマが「引揚げ」と結びついていることを、小説「引揚者収容所」（1972年、『文藝』8月号）と「今も傷口はふさがっていない」（1983年）を見ることで確かめたい。加えて、不意に再来する記憶や居場所のなさといった問題が、〈幽霊〉として形象化されることを見たい。

3. 「引揚げ」と〈汚物・糞〉

3.1.1. 「引揚者収容所」における身体の負性としての糞尿

「引揚者収容所」の話者「私」は、かつて小学校だった建物の一室に、同じく引揚げ船を待つ大勢の植民者とともに収容されている。教室は「上下の空間を蚕棚のように二段に区切」られており、「私」は上段の「二つの梯子の中間」の場所にいる。「下へ降りるために私は人々の体の上をまたいだり、しなって隙間から下の覗ける薄い板の縁を踏んだりしながら軽業師のように体の平均をとって歩いて行かなければならない」。「私」にとってこの状況は、「いるべき場所のない」現実を意味しているだろう。引揚げ船を待つ他の人々へと、「私」の眼差しは容赦なく向けられている。このことは同時に、「私」の一手一投足が常に他人たちの目に晒されていることを意味する。食事は日に二回、毎日乾パンと「赤黄色の、どろどろした液体」「えたいの知れぬ液体」が支給される。「私」たちはそれを口にするものの必然性へと状況によって駆られている。トイレは校舎の外、凍りついた坂の途中にある。そこまで行かず用を足す者たちがいるために、道の両脇に盛られた雪には「黄色い穴の痕跡」があり、校舎の裏には「黄色い塊りが幾つもたまっている」。「引揚者」＝植民者たちは、

それまで居場所としていた植民地を逐われ、戻るべき祖国として想定した、「いるべき場所」であるはずの「内地」を目指す。その「送還」の途上にある人々にとって差し迫った問題は、ひとつには食であり、また衛生、排泄だろう。常に監視のもとに管理される「引揚者」たちは、排泄する姿をも他者の眼差しの前に曝け出すことになる。

坂は途中で折れ曲り、また先へ伸びる。その僅かばかりの平坦な土地に田舎のバス待合所のような簡単な屋根が作られており、その下に細長い穴があった。穴には幾本も板が渡してあり、それが指定された便所だった。間仕切りも戸も何もなかった。人々は、そこへ一列に並んで用をたした。足をかける板は穴の上に置いてあるだけなので身動きすると揺れ動いて下に落ちそうになる。誰もが空いていそうな時間を狙ってくるのだが、何百人もいるのだから誰もいないことはありえなかった。順番を待つ人が周囲に何人もたまることもある。他では笑ったり話したりしていても、そこまできると人々は真面目な顔をして黙っていた。男も女も後向きになって大きく衣服をまくりあげている。誰の尻も驚くほど白かった。〔中略〕彼らの呼吸と排泄物の湯気がなまなましい裸の皮膚の間から立ちのぼった。

「引揚げ」時の便所に関する記述と同様の内容は後年の吉田のエッセイにも見られる（「私の満州・樺太」2001年、『朱夏』第16号、せらび書房）。のみならず、他の「引揚者」の体験記とも類似している⁵。また、厚生省援護局編『引揚げと援護三十年の歩み』（1978年）における樺太の「収容所」に関する記述内容とも符合する。しかし、厚生省援護局の文書における記述では「収容所」体験を「同胞」の受難に回収する色調が顕著であるのに対して、「引揚者収容所」には、「同胞」への共感を思わせる記述がほとんど見られない。他人の身体が自分を圧迫するのみならず、自らの身体までもが「私」にとっての脅威となる。同作における〈汚物・糞〉はいやでも目につくものであり、自己の安定性を脅かすものである。別の場面で、制限時間十分以内でのシャワーを許可された「私」たち引揚者は、一部屋ごとの集団となって校門を出る。浴場には天井を縦横に走る太いシャワーヘッドがぶら下がっており、「風呂ではなくて工場みたいだった」。集団でシャワーの下に進むと、「私」の目の前には一メートルおきに裸が並んだ。「浴びるだけでは暖かさは表面をすべり落ちていってしまう。手をあげたり足を曲げたりしたが、それでも湯のあたらない部分が残る。そこがどんな色をしているか、どんな臭気を発しているか、私にはわかった。そこは黒緑色に粉っぽく変色していて菜っ葉の腐ったにおいがしている。上から浴びているだけでは、どうしても残ってしまう部分。〔中略〕突っ立ったままの、規則的な間隔をおいた裸の群像は、その水の流れによって上から吊るされている肉塊のようだった。肉屋の広い冷蔵室の中に似ていた」（傍点引用者）。他者へと向けられる「私」の眼差しは、引用部において自らの身体をも「臭気」を発する汚れたものとして見出す。「私」自身も〈汚物〉へと接近し、「肉塊」の一部となっているのである。どろどろのスープを飲み、他者の身体とともに閉所に収容され、排泄する姿を晒し、「臭気」を漂わせた「肉塊」のなかの一部として自らを認識する。「引揚者」たちに共通するのは、物を食べ汚れを排出する身体それ自体との直面、といった体験だろう⁶。「いるべき場所」のない状態において、食や衛生、排泄にかかわる身体は、自己を脅かす他者として表出する。このようないわば身体の「負」の側面について、『人工身体論』（1990年）の金塚貞文は、以下のように述べる。

糞をひるとは、動物的なこととまでは言わずとも、やむを得ない生理上の必要にすぎず、そうであればこそ、そこにおいて「からだ」は、負性の体験として情動的、受動的に痛感されるものでしかない。この「からだ——やむを得ない生理」という負性の、受動性の体験は、排泄に限らず、眠り、病い、そして死という場面においても見られるはずである。あるいは逆に、セックスとか、スポーツといった場面においては、負の負としての正性の体験ともなり得るだろう。

いずれにしても、われわれ人間にとって、何かしら余計なもの、なければならないにこしたことはない生理的なもの、動物性の残滓のようなものとして、「からだ」はそうした負性の体験として、苦痛、あるいは快感、苦悩、あるいは悦楽といった情動を伴って自覚されるのである。そしてまさに、身体が哲学的問題、存在論的問題となるのは、この文脈においてこそなのだ。⁷（傍点引用者）

「引揚者収容所」における〈汚物・糞〉にかかわる記述には、やはり「負性」と言うべきニュアンスが強く見られる。しかし、〈汚物・糞〉のテーマは同作において「引揚げ」体験の負性や、そこから容易に連続する「引揚者」の被害者性を強調することに決して尽きてはいない。それどころか、この小説が〈汚物・糞〉を介して向かっているのは、それらの現前によって露わになる自己の存在への問いではないか。身体から放り出される〈汚物〉の存在は、それらと自己との境界を問い直す契機を生む。糞尿が曖昧な排泄物＝生産物であるために、それらを凝視することは自己の境界の不安定さを露呈することに繋がる。そのことは既に見た「入浴」の場面や、以下引用する汽車における一場面にとりわけ顕著である。

〔…〕汽車は知らぬ間にやってきて、あっという間に発車してしまう。たまたま、そこにいた人だけが乗れる。三つの駅を同じようにして通過すると、その後は駅では止らなかった。座席の間にも下にも人がいた。どの人も大荷物を持っているので身動きもできなかった。その中で便所へ行くためには、よほどの大決心をしなければならない。〔中略〕動くのも止るのも、いつでも突然で何の理由もないように思われた。私は通路の連結器の傍にしゃがんでいた。隣に頭の高い老人がいて半分閉じた眼の間から絶えず濁ったヤニを出し続けていた。坐りかたや、頭をまわして周囲の人の顔を見るようすからは、そんなに弱っているとは思われなかったのだ。汽車が坂をのぼりはじめたとき、私は自分の荷物や腰をおろしている汽車の床が濡れているのに気づいた。荷物を引き寄せると、黒い床が見えた。私は老人の顔を見た。老人は口をあけていた。私の視線を感じると、「ごめんよ」と言った。〔中略〕私のズボンに水が浸みこみ、半コートの裾が湿っていくのがわかった。こうなれば同じことだった。私は連結器の上にいるのだから、水は、もうそれ以上他の人のほうへ流れていくおそれはない。私は我慢するのをやめた。どちらにしても私は我慢の限界に達していた。ふっと体を柔らげると熱い水が溢れだした。〔中略〕老人の体は汽車の振動に従って床の上で少しずつ揺れ動いた。床は、すでに乾きかけ、臭気が上のほうへのぼってきた。私の体も老人の体も同じ動き方をした。私は汽車と癒着し、老人と尿を共有し、老人の死体と癒着していた。

「私」の回想中のこの場面は、収容所で居合わせた「男」との性的な接触から続けて記述される。回想されているのは「収容所」へと向かう汽車での出来事だ。言うまでもなくそこは「いるべき場所」

などではない。しかも「私」がいたのは「連結器」の近くである。「大荷物」を抱えて「いるべき場所」であるはずの「内地」への船が出る港を目指す人々に取り巻かれてしゃがむ「私」に、身体の負性が感じ取られる。隣には「濁ったヤニ」を出し続ける老人がおり、尿が床を濡らす。自分が済まないことをしたと詫び、「老人」は息を引き取る。「私」は身体の負性であるところの尿意を押さえつけることを諦め、「汽車」や「老人の死体」と「尿」によって結合するのである。ここにおいて身体の負性と「私」＝自己の存在が直接的に結びつけられると同時に、糞尿を垂れ流すことが他者との結合へと連ねられる。「私」の境界は他者の汚物によって侵犯され、同時に「私」の身体の負性が他者の領域を侵す。収容所にいる現在時の「私」によるこの回想はさらに、男との性的な「癒着」を、排泄を介した「死体」との「癒着」と重ね合わせてもいる。〈汚物・糞〉の執拗な記述は、あたかも「私」が身体の負性そのものであるかのような印象を読者に抱かせる。これらの記述により生（性）／死の境界が排泄を介して攪乱されると同時に、回想すること自体が「私」の宙吊り状態を強調し、居場所のなさを浮かび上がらせている。死んでいるはずの「夫」と会話を交わす場面を考慮に入れば、生死の境界の曖昧さは明らかである。死者との会話は〈幽霊〉のテーマとも結びつく記述だが、ひとまず、排泄物を介した自他、生死の境界の不安定化を押さえておきたい。

すでに述べたように、『引揚げと援護三十年の歩み』がいわば「同胞」の受難として「引揚げ」を強調するのに対して、「引揚者収容所」における〈汚物・糞〉や身体の負性に関わる描写は、「引揚者」の被害者性をのみ語るために機能していると見なすには、あまりにも過剰である。同作において強調されるのは、汚物や排泄物を介して自他の身体あるいは存在が見慣れぬものへと変じていく様や、その衝撃だと見るべきだろう。ここでは「終りのない夜」と同様に、汚らしいものや排泄物に接近しそれらと隣接あるいは接合することで「私」が変容を被っている。自らの身体までもが見慣れぬものへと変じてしまう状況において、「同胞」という観念に基づいて他者への関心が払われることは全くない。「天狗」と仇名される「薄青い眼」の男（おそらくはソ連兵）が他者であると同様に、極度に閉鎖的な監視下の環境で、眼差しによって探り合う「引揚者」たちもまた互いに見慣れぬ他者である。均質で単一の「同胞」の受難といった物語に回収されない一篇の過剰さは、ここでは汚物・糞尿・あるいは身体の負性によって生み出されている。

3.1.2. 「引揚者収容所」における〈幽霊〉

元よりいるべき場所ではない「収容所」に身を置く現在時から、自他の身体の負性を間近に見つめながら、来るあてのない「引揚げ船」を待ちつつ過去を回想する「私」は、死者であるはずの「夫」へと語りかける。意識不明だった「夫」を病院に残して、「私」は汽車に乗ったのである。いるのにいない・いないのにいる〈幽霊〉であるところの「夫」は、「なぜおれを捨てて行ったのだ」「お前が殺したのだ」と「私」を非難する。しかし、自分から「夫」に話しかけもする「私」は、「夫」の言葉を躲している。「私」が近い人間と死別するのは初めてではなかった。「私」はかつて死別した「母と弟」に思いを馳せる。「彼らは私を責めなくなった。無限にやさしくなった。だが、夫は生きているままだった」。断片的な記憶の中で、「母と弟」は「半ば腐爛しかけた」「死体」となっている。その腐爛死体に触れると「私の指はずぶずぶと布の中にのめりこんだ」。そこにもはや「人間の眼鼻」はなく、猛烈な腐臭が立ち昇る。「自分が母と弟に置き去りにされた」と考える「私」は、「母と弟」の死を、二人が自分を捨てたこととして捉える。対して、〈幽霊〉として傍らに現れる「夫」は、「私」が自分を「捨てた」のだと非難する。「私」を捨てた「母と弟」は「優しく」なったが、「私」に捨て

られた「夫」は「生きているまま」で「私」を非難し、「私」から去ることがない。「私」に未了の問題を突きつける点で、〈幽霊〉は〈汚物・糞〉と同様に境界を攪乱し、宙吊り状態を作り出す。

〈幽霊〉との対話は、「私」の位相をも不安定なものにする。〈幽霊〉の出現から続く小説の末部、眠れない夜中に「私」は廊下を往復する。「凍りつく寒さの戸外」まで出ずに、人々は「廊下に用をたしに出て」くる。「私」は廊下から「自分のいる部屋」を見つめる。「私は自分のいる部屋の外に立っている。戸の向う側、部屋の中にいるのは何だろうか。猥雑で生暖かな気配。そこでは何十人も老若男女が同じ一つの眠りの中にいた」。「部屋の中にいるのは何だろうか」という問いに対応する答えはない。「私」の眼差しの中で、人々は境界を失い、人間ではない「何」かになっているのだろうか。あるいは、この「夜中」自体が「私」の回想で、回想の中の「私」が〈幽霊〉のように「自分のいる部屋の外に立っている」のだろうか。少なくとも、この記述における「私」は宙吊り状態におかれ、人間ならざる「何」かを「収容所」に見出している。「船」の来る気配もなく結末を迎える「引揚者収容所」において、「私」の宙吊り状態は永遠に持続する。〈幽霊〉と語らう「私」自身が〈幽霊〉的な境位へと彷徨い出てしまうのである。

3.2. 敗戦国の負債としての「棄民」・余計者・厄介者

〈汚物・糞〉と〈幽霊〉とは、「何かしら余計なもの」、なければならないにこしたことはないもの、という意味で結びつく。また吉田の小説において両者は、何か未了の問題を突きつけ、境界を侵犯し、主体を脅かすモノである。余計者・厄介者としての性格は〈汚物・糞〉と〈幽霊〉に共通するといえる。これらの主題は、引揚げにかかわる吉田のテキストとも連続性を持っているのではないか。「引揚げ」体験に関する吉田のテキストには、「引揚者」が戦後体験することになる余計者・厄介者扱いの問題が見出せる。それまでの居場所を敗戦によって逐われ、「いるべき場所」としての「内地」を目指した「引揚者」たちは、しかしそもそも多くが「内地」に「いるべき場所」を持たない「植民者」であった。朴裕河は、「外地」への「農業移民」やその他の移住者たちが「植民者」にほかならないことを指摘しながら、同時に「彼らの多くが、官僚などのエリートを除けば、日本内で生きて行く方便を見出せなかった人——棄民でもあったことも合わせて記憶しておくべきだろう。〔中略〕農村の場合、朝鮮や満州へ出て行ったのは主に「二男、三男坊」であった」と論じている。すなわち「国家の棄民・移民政策にすがるほかなかったのは、政治・経済エリートを除けば日本内に居場所を持たなかった人々だった」⁸。「引揚げ」時、13 歳になって間もなかった吉田にとって、大人たちに倣って「帰るべき場所」として想定した「祖国」で受けた「検疫」と、その後体験することになる「いるべき場所のなさ」は、帝国における棄民政策の帰結として考えることができるのではないだろうか。吉田が「引揚げ」のトラウマ的な記憶を語ったテキスト「今も傷口はふさがっていない」（1983 年）を見たい。

私はあるとき、知人がこういうのを耳にした。

「あいつら、虱だらけだった。おかげで町中に虱がうつった」

その人は青森県の小さな町の出身者で、ここで「あいつら」と言っているのは引き揚げ者のことである。彼は地位も教養もある男で何回か他人の急場を救ったことがある。

私も他の人たち同様、彼を尊敬しているし、その発言のあともそれは変わらない。しかし、彼の言葉を私はどうしても忘れられないのだ。

それは私が虱たかりの引き揚げ者だったからだだろう。私は南京虫とさえお馴染みだった。引き揚げて上陸するや否や物のようにこづきまわされながらたつぷりと白い粉を浴びせられるのはどんなに屈辱であったことか。〔中略〕その青森の人にとっては戦争より引き揚げ者より虱のほうが大事件だったのだ。私は彼の言葉のあまりの冷たさに涙がこぼれそうになったが、やっとなと気を取り直した。当然なのだ。引き揚げ者は国にとっても肉親たちにとっても何の利益ももたらしはしなかったのだから。もちろん、一家の支柱たるべき父、兄、息子、夫などが帰ってきた家は喜んだだろうが、女子供が引き揚げてきても厄介者がふえるばかりなのである。(傍点引用者)

「あいつら、虱だらけだった」という「知人」の発話が、話者を「引き揚げ者」であった時空へと引き戻し、「物のようにこづきまわされながらたつぷりと白い粉を浴びせられ」た「屈辱」を喚起している。また、「引揚者」がいかに余計者・厄介者として扱われ、あるいは自己を「何の利益ももたらさない存在」として意識したかが語られている。「引揚者」としての記憶が話者の元に突然再来するものであることにも留意しておきたい。当事者にとってそれは未了の問題であり続ける。

上記引用で語られる記憶に符合する出来事は、『引揚げと援護三十年の歩み』の「上陸後検疫」に記述されている。

引揚船内における検疫 引揚港に到着した引揚船は、港内の検疫錨地点において、①引揚船の運航報告書の点検、②海外の出港地における伝染病流行状況、③伝染病患者、疑似者、容疑者の有無の検診、④船内衛生状態等の検疫をうけ、異常がないと認めたときは、連合国軍監督将校の許可を得て、入港し引揚者を上陸させた。

集団引揚終了後は、検疫については、一般の外国人等の入国と同様の扱いにより措置されることとなった。

上陸後の検疫 上陸後は、まず引揚者の携帯品を消毒し、次いで検診所において精密な検査を行い、健康者は、入浴のうえ各種の予防注射をして検疫終了となる。引揚検疫は連合国軍の指令により従来の海港検疫のほか、結核、癩、炭疽等すべての伝染病の検診ならびに虱の有無に及ぶ広範かつ嚴重なもので、特に同胞が引揚げてきた海外の現地は、コレラ等の伝染病の常在地又は流行地が多いうえ、大集団が短時間にしかも不衛生な状態で移動し、入国してくるので、コレラ等の伝染病に対する検疫は最も重視され、引揚者の全てに大量のDDT消毒〔引用者註:有機塩素系殺虫剤〕を使用するなど、防疫の完璧を期したところである。⁹ (傍点引用者)

「引揚者」たちは、「一般の外国人等の入国と同様の扱い」により「消毒」と「精密な検査」を受けた。「検疫」は、「同胞」を同定する場として機能したと考えられる。同時に、帝国崩壊によって「大集団が短時間にしかも不衛生な状態で移動し、入っ」てくる「引揚者」たちという負債を負わなければならないようになった敗戦国の様相として、これらの記述を考えることもできるだろう。すなわち、帝国は口減らしと領土拡大のために「外地」へと植民させた人々を、その崩壊に際して「不衛生」な「大集団」として迎え入れなければならなかった、ということである。「引揚げ」に関連して吉田のテキストで語られる「傷口」は、帝国主義とその破綻に淵源していると考えられることができるだろう。「引

揚げ」を語る吉田のテキストに、汚物や糞尿が描かれること、そして吉田自らが戦後日本において汚物のように忌み嫌われる存在であることを意識する記述の接点が見出せる。未了のテーマである〈汚物・糞〉は、「引揚げ」の記憶と結びつくのである。

同時に、余計者扱いによって生じる「いるべき場所のなさ」は、〈幽霊〉のテーマと結びつく。〈幽霊〉とはいるのにいないモノ・いないのにいるモノであり、何かを主張し、要求する。〈幽霊〉とは過去にあった何かを示すモノなのである。それは不意に訪れ、抑圧された記憶や忘却された負債を喚起する。「引揚者収容所」においても、〈幽霊〉の出現と「私」の回想とは強く結びついている。想起することによって〈幽霊〉と言葉を交わし、あるいは回想が不意に〈幽霊〉を伴ってやってくる。〈幽霊〉はその出現によって過去の出来事へと立ち戻ることを「私」に求めるモノである。

「引揚者収容所」において「私」の現在時が曖昧になるのは、過去と現在を混淆させる構成の効果であるが、それを可能にしているのは、内部／外部、自己／他者の境界を曖昧にする〈汚物・糞〉の機能に加え、現在／過去、現実／非現実、生／死を攪乱する〈幽霊〉の存在だろう。

4. 反芻する追体験者としての〈幽霊〉——「幽霊の弁」

4.1. 「いるべき場所のなさ」から見る吉田知子文学

「引揚者」の感じる「いるべき場所のなさ」には、帝国主義とその崩壊の帰結としての側面があることは前節で述べた。吉田の文学には、話者（ないし視点人物）が「幽霊」ないし「オバケ」と化してしまう小説が散見される。あてもなく歩き続けるそれら〈幽霊〉は、「いるべき場所のなさ」を感じあるいは訴え彷徨するその他の吉田の小説の話者たちと連続性を持つ。前者は文字通りの〈幽霊〉である。吉田の文学における〈幽霊〉たちは、生きているか死んでいるかさえあやふやな状態で彷徨する。例えば「天気の良い日」（1998年、『一冊の本』8月号）や「野良おばけ」（2006年、『文學界』4月号）では、話者が何者なのかさえ判然としない。理由もわからず、自分がどこにいるのか、何者なのかもわからないまま彷徨を続ける——あてどない彷徨の主題は、既に見た通り「終りのない夜」から見られ、吉田の文学に通底する。この意味で、後者の、明示的に「幽霊」と呼ぶべき存在が出現しない小説における話者も、「いるべき場所のなさ」を抱えて彷徨う〈幽霊〉的な存在と見なすことが可能である。

ここで「いるべき場所のなさ」が戦争体験と結びつく小説を見ておくことは、〈幽霊〉を理解する上で有効だろう。「引揚げ」後の吉田が過ごした奥山を舞台のモデルとした「無明長夜」（1970年）の話者「私」は、幼い頃に母に連れられて疎開してきた村で育つ過程で疎外感や「いるべき場所なさ」を意識するようになる。言うなれば「確かなもの」が自分には欠けている。そのような感覚を訴えながら、「私」は連想的に自己の歴史を読者へ詳述する。彷徨い続ける「私」は、最終的に「私」が「私」であるかどうかさえ判然としない「白い闇」に至る。

「満州は知らない」（1983年、『新潮』11月号）で問題化されているのも「いるべき場所のなさ」である。視点人物の「静香」は、幼少時の「引揚げ」体験の断片的な記憶を未消化なままに抱え、叔母夫婦のもとで「余計者」「厄介者」である自分を意識しながら育つ。「自分をえたいの知れぬかたまりのように感じていた。名前もなく親もなく子もない人間、人間かどうかともわからぬ何かが、あてもなくせせと歩いているだけだという気がしてならない」。この冒頭の一文には、自身を異物のように感じる話者の感覚が集約されている。いるべき場所のない感覚を抱きながら「あてもなくせせと歩」き続けるしかない〈幽霊〉的存在は、余計者であると同時に、自らを「えたいの知れぬかたま

りのように」感じもする。言うまでもなく、これは〈汚物・糞〉的な形象でもある。この自己嫌悪は過去の出来事に直接関わる。未了の問題を未消化なまま抱えているために、「静香」は彷徨を続けざるを得ない。

4.2. ナショナルヒストリーから疎外される「幽霊」

戦争の記憶と〈幽霊〉のテーマを架橋するテキストとして、「幽霊の弁」(1990年)は重要である。吉田は近年に至るまで「引揚げ」体験をメディアで語ってきた。その証言を追って行くと、かつて語られなかった体験の細部が少しずつ語られるようになってきたことがわかる。「引揚げ」体験当事者としての吉田は、自らの記憶を反芻し追体験を重ねることで、それらを自らのものとして引き受けてきたと考えるのが妥当だろう。追体験の主体にとって、反芻される記憶は未だ済む／澄むことのない未消化な出来事であり、未了のものだと言える。追体験の主体は、いわば固有の時間性において宙吊りにされているのである。その時間性は、国家の時間——すなわち「戦争」や「戦後」を済んだこととしながら絶えず制作される国民的な物語の時間——に組み入れられることがない。故に、追体験の主体は、固有性を捨象しながら神話として流通するナショナルヒストリーを前に、自らをあたかもいるべき場所(時)ではないところにいる余計者であるかのように見出すことになる。

空襲警報が鳴ったり、モンペ姿が出てきたりするドラマは、もう「時代劇」なのだ、と聞いて仰天したのはだいぶ前である。[……] 深い傷は治るまでに時間がかかる。いや、痛みは薄れることはあっても傷そのものは不治である。その傷は時として自分そのものであるから、寝ても起きても頭の片隅にそれがしっかりこびりついている。

何かというと「戦争中は……」と口に出す人、決して戦争の話をしていない人、どちらの傷が深いかということはだれにも分からない。とにかく、死ぬまでそれは「時代劇」にはならないのである。

朝起きて、防空頭巾の子供と国防服の男が道を歩いていても驚かない。ああ、やっぱり、と思う。このながい平和が夢のようにたよりなくあやふやに見えているのである。地獄を見た人にとって、そのあとの生は五十年あろうと六十年あろうと、付録でしかない。

だが、一般的に言えば、戦争は、もう「時代劇」になってしまった。すると、この自分は幽霊か。時代劇の中の人物がこの世に化けて出たのか。(傍点引用者)

ナショナルヒストリーは、固有の戦争体験を国民の受難＝集団的経験へと回収する。引用中の「時代劇」とは、ナショナルヒストリーが再生産され消費される形態にほかならない。追体験を続ける主体は、社会にとって「時代劇」のなかにいるべき者、過去のもの、既に済んだこととされるのである。しかし、主体にとってみれば、未了の状況が「朝起きて」再び目前に現出していたとしても、何の不思議もない。国民国家と追体験の主体との間のこのズレは、追体験の主体を以て自らを〈幽霊〉であるかのように認識させるに至る。

〈幽霊〉とは、未了の問題を問い続けるが故に宙吊りになるが、共同体からは済んだもの／死んだ者と見做され、そのために「いるべき場所のなさ」を抱える存在である。この意味での〈幽霊〉性は吉田の文学において、既に見た「無明長夜」「満州は知らない」などの戦後小説のみならず、言葉通りの意味での「幽霊」(オバケ)小説群にも通底する。また、既に見てきた通り、吉田の文学におけ

る「幽霊」的な存在は、余計者・厄介者であり分身的存在でもある〈汚物・糞〉と強い親近性を持つ。「終りのない夜」の「老婆」、死者である夫と会話する「引揚者収容所」を見れば明らかだろう。

吉田の小説における〈幽霊〉と〈汚物・糞〉の接近は、とりわけ90年代のテキストにおいて顕著に見られる。〈汚物・糞〉と〈幽霊〉は、ともに境界のあちら側にあるべき忌まわしいものであり、こちら側においてはタブーとされるものである。故に、抑圧され不可視化されたそれらが不意に目前に現れたとき、こちら側の秩序は攪乱され、価値転倒が起きる。90年代の吉田の小説には、忘却

されていた記憶や抑圧されたモノが不意に再来し、そのことによって話者が——^{フエティッシュ}呪物、汚物、動物、人間以外のものに——明示的であれ暗示的であれ変身する¹⁰という物語内容を持つものが散見される。ここでは、その中でも〈糞〉と〈幽霊〉とが強い結びつきを見せる小説として「常寒山」（1993年、『文學界』7月号）と「恩珠」（1996年）を挙げておきたい。とりわけ「恩珠」は、抑圧された記憶の再来というすぐれて〈幽霊〉的な物語と、穢いもの、汚れ、そして糞にかかわる記述との結びつきが見られるだけでなく、忘却された記憶が他者への暴力を暗示する点で、戦争の記憶を語る吉田の他のテキストとの連続性をも持っている。次節では〈幽霊〉と〈汚物・糞〉に留意して「恩珠」を分析するが、その前に物語の要点を確認しておきたい。

ある時、「私」のもとへ「背の低い色の黒い女」が突然やってくる。言葉はほとんど通じない。どうやら「日本人ではない」と「私」は思い、その後「女」が夫の取引先の社長「崔さん」の関係者だと思い出す。彼女＝「恩珠」は「杭」の立てられた墓の写真を「私」に見せる。どうしてもそこに行く必要があるのだろう。仕方なく、女とともに「高郷村」の山奥で墓を探すうち、その墓が「畜生墓」らしいと判ってくる。「私」と「恩珠」とは、なぜか次第に意思疎通が出来るようになる。汗や汚れにまみれて山奥へと分け入り、とうとう墓を見つけると、「恩珠」が絶叫し、号泣する。墓には、ペットと思しき名前のほか、「パク」「コウ」「サイ」「キン」などの朝鮮人名が列ねられている。「恩珠」は泣きながら「私」に何かを訴える。何度も「うんじ」と言うのである。どうやらそれは「恩珠」の読みであり、女は、「私」が「恩珠」その人なのだと訴えているらしいと「私」は理解する。

5. 「恩珠」分析——〈幽霊〉としての便

「恩珠」（1996年、『文學界』2月号。『箱の夫』、中央公論社、1998年。）は話者「私」による一人称小説である。本稿での分析には単行本所収のテキストを用いる¹¹。「女」は、忘却された記憶を媒介する者として、「私」に「不快感」を覚えさせながら再来する。

表で誰かが「おくさん、おくさん」と呼んでいる。女の声だ。声は裏口へ廻った。どうして呼び鈴を鳴らさないのだろう。押しつけがましい無遠慮な声。アクセントがおかしいのも不快だった。オクサと低く、最後のンを高く伸ばす。

身構えて玄関の戸を開け、「はい」といった。背の低い色の黒い女がゆっくり歩いてきた。見たことがある顔だが、誰なのかわからない。

きたよ、わたし。

ええ、と私はあいまいにうなずき、必死で思い出そうとした。物売りではない。そういう関係の人ではない。中へ招じ入れなければならぬ客だ。とりあえず「どうぞ」というと、横柄にちょっとうなずいて上がってきた。

「押しつけがまし」く「無遠慮」で、アクセントもおかしい声が「私」を呼んでいる。その「背の低い色の黒い女」には見覚えがあるものの思い出せない。とにかく、「中へ招じ入れなければならぬ客だ」と「私」は思う。引用部直後の箇所、「敵意を持っているようではないが友好的でもない」その女を、「私」は「日本人ではないのだ」と思っている。そして「私」はその女が「夫の取引先の社長」である「崔さん」とともに、三年前に家にきた女であったと思い出す。「パクかキン、いや、ウンなんとかだったか」。その女は「子供のころ日本にいた」が「それから以後はずっと釜山に住んでい」たはずで、日本語が話せないのも当然だった。女は、誰か、あるいは何かを探していることを、不慣れた日本語と身振り手振りで「私」に訴えてくる。「わたし、さがす。おくさん、さがす」と言いながら、数葉の古い写真を「私」に見せる。「幼児と母親。川で遊んでいる女の子。木の下にいる女の子。山をバックにしたお寺と数軒の農家。もう一枚は山の中腹の林の写真だった。林の中には杭が立っている」。「女はその杭を指差して「おとうさん」と」言う。その場所に見覚えがある。写真には「高郷村川西」のメモがあり、「高郷村」で育った「私」は、「墓。そうだ。これはお墓なのだ」と思い出す。「これがお墓だということを私は知っている」。女はさらに一枚の写真を「私」に見せる。「センダンの木の下」に女の子がおり、その裏には「恩珠二歳」とメモがある。「恩珠」が女の名前なのだと「私」は思う。そして言葉の通じない「恩珠」を、「車なら一時間ちょっとで行ける」「高郷村」まで連れて行くことに決める。

助手席の「恩珠」を観察した「私」は「服装、持ち物、態度、口のきき方、どう見ても女社長か、大実業家の妻」だろうと結論する。「どうしてもあの場所に行きたいんですか。それとも写真を見せただけなの。あれはあなたのお父さんのお墓なんですか。お墓だとしても、もうしようがないでしょう」と「恩珠」に問いかけるが、相手は「わたし、おとうさん。うんじ、おとうさん。」などと熱心に言うだけだ。「息をしているとも思われないほど」静かになったかと思えば「おそろしく雄弁に大演説を」始める「恩珠」は「語気からすると何か命令しているような感じだった」。「恩珠」の亡父の墓を捜すなど、「どうして私がそこまでやらなければならないのか。そんな義理はない」と「私」は考える。しかし、「強くうなずいて私の目を見る」「恩珠」は、困っている「私」を「励ましている」かのように、「私」を墓探しへと駆り立てるのである。

登りくだりの激しい山間部の村落で車を駆って、二人は写真の場所を尋ねてまわる。若い人は首を傾げるばかりだが、老人のなかには「これはおおかた、畜生墓だなあ」とこたえる者もいる。「私」はその言葉に気を留めようとしない。山の中を車で走るうち、外を見ていた「恩珠」が「川」を見て何か言いはじめる。

恩珠はダッシュボードの上に置いてある写真を持って車を降りてきた。川で遊んでいる幼児の写真だった。

おくさん、うんじ、おくさん。

恩珠は強い力で私の手を引いた。道から降りて川へ向かう。川まで十メートルほどの草の中を下も見ずに歩く。乾いた草地と見えていたが、爪先が湿った土に埋まる。恩珠のパンプスも泥だらけになっていた。川は幅が広いわりに浅い。川底にまるで大きさを揃えたような丸い石が並んでいる。あの幼児のいる写真の川がここだというのだろうか。写真と見比べたがよくわからない。

土手の形が違うようでもある。写真だと向こう側にもっと木がはえているようだ。恩珠はまだ興奮している。靴のままいきなり川を渡ろうとするので私は止めた。さかんに鶏小屋のほうをさして何かいっている。

わかった、わかった、あっち側へ行きたいのね。

この「川」が明らかに境界線を示していることに留意しておきたい。「恩珠」は写真を持って「おくさん、うんじ」と言いながら「私」の手を強く引く。二人の足は「泥だらけ」になる。「恩珠」は、「私」を「あっち側」へと連れて行くことを望んでいる。

山の中腹にまで来た二人は車を降り、歩きはじめる。「もう駄目だわ。やっぱり帰ろうか、と私は恩珠に言った」。すると、「恩珠は「もう少し」といった。「あと少しだけだから。お願いだから」。口で言ったのではない。私の顔をじっとみつめていただけだが、不思議にするすると恩珠のいいことがわかった」。「あっち側」へと向かって、「恩珠」にともなわれて進んできた「私」には、言葉の通じないはずの「恩珠」の意思が解ってしまう。二人は「野茨の藪を突っ切り、汗や泥にまみれ、「畜生墓」を探して歩き続ける。不意に「私」は、目の前の光景に「何か見覚えがある」と気づく。「たしかにここへ来たことがある。／この向こうなのだ」。二人は「谷川」を渡る。「恩珠の上等そうなコートはほころび、胸まで泥だらけになっていた」。「女社長」のような金持ちに見えた「恩珠」が、山中を「私」とともに歩きまわることで、泥に汚れている。その記述は同時に、「私」も同じように汚れていることを意味する。「私」は「恩珠」を助け、「私」がよろけると「恩珠が手を出し、それから手をつないで歩いた」。まるで「私」と「恩珠」は、一心同体の近い存在であるかのような様相を呈している。同時に「私」は、「恩珠は強い。私よりずっと強い」と思う。「私」に呼びかける「不快」な声であり、厄介な役目を負わせてくる「日本人ではない」存在だった「恩珠」に、いまや「私」は親しさを見出している。林を抜けると、黒っぽく朽ちて倒れかけた何本もの「杭」が見えてくる。無数の「杭」には、よく見ると字が書いてある。「エスの墓。／隣りは「コロの墓」だった。／なんだ、ここ、ペットのお墓だったのね」。「恩珠」はまだ「杭」の一本一本を調べている。「私」は「恩珠」の肩を叩き、「犬や猫の真似」をして、帰ろうと声をかける。しかし、「恩珠」は「私」に何事かを訴えている。

恩珠は黒い塊になっていた。彼女は杭を指差し、低い声で命令した。その命令はなぜかはっきりと日本語で私に伝わった。

もつと読んで。この杭の字を読んで。みんな読んで。これも、これも、これも。

私は再び懐中電灯をつけ、倒れている墓標を起こし、泥を落とし、前や後ろへまわって一つずつ読んでいった。

ピーちゃんの墓。松次郎の墓。たまの墓。パクの墓。コウの墓。サイの墓。キンの墓。ちびの墓。シロの墓。

字が消えてしまっているものもある。墨が流れてただ黒いだけのものもある。

うんじ、と恩珠がいった。

恩珠は、何度も私に「うんじ」という。私は「ねえ」というような間投詞だろうと気にしていなかったが、今度はまともに私に向かっていっている。

うんじ、と私もおうむ返しにいった。

おとうさん。

お父さん。

恩珠は白いワンピースを着た幼児の写真を出した。恩珠と書いてあるところを指差し、うんじ、といい、私を指差す。

なに、それ。どういうことよ。恩珠。オンジュ。ウンジュ。そうか。そう読むの。うんじって恩珠のことなの。そういつているの。私が恩珠だと。まさか。そんなはずがないでしょ。何いつてるのよ。（傍点引用者）

「黒い塊」となった「恩珠」が、「杭」の字を読むように「私」に要求する。また、「私」は「恩珠」の呼びかけを「おうむ返し」に繰り返しもする。「私」と「恩珠」は分身的な性格を帯びる。朽ちかけた「畜生墓」には、ペットの名と並んで朝鮮人と思しき名が並んでいる。このことに関して、ひとまず留意すべき問題は二つある。まず、それらの名が、小説冒頭で女の名を思い出そうとした時によぎった名と符合することだ（「パクかキン、いや、ウンなんとかだったか」）。「サイ」には「崔さん」と関係があるかもしれないという含みがある。「黒い塊」へと変じた「恩珠」（と思われた女）も含め、墓に至るまでに境界を越えてきた「私」は、死者たち——すなわち忘却された記憶それ自体として回帰する〈幽霊〉と対峙することを余儀なくされているのである。〈幽霊〉と向き合うことは、物語における生と死、現実と非現実の境界に揺さぶりをかける。

もうひとつは、村の人々にさえ忘却されかけている、誰も訪れない山奥の「畜生墓」と呼ばれる「杭」に、朝鮮人の名前があるということ自体の暴力性である。このことについて考える前に、一篇の重要な結末を見ておこう。「恩珠」だと思っていた女は、「私」が「恩珠」＝「うんじ」なのだと言い、「パクの墓」にとりすがって驚くような大声で泣き出す。

上半身を折り曲げ、両手を上げて天を仰ぎ、髪をかきむしる。たちまち眉も目も鼻も溶けたようになつた。次に歌を歌った。お経かもしれない。歌の次は、またアオー、オオー、アオーウ、ウーウーウーと号泣する。耳が変になりそんな大音声だった。それからまた歌。それは無限に続くように思われ、私は途方に暮れて茫然と立っていた。〔中略〕

それは始まったときと同じように、急に止まった。そしてまた同じことをいう。

うんじ。うんじ。おくさん、うんじ、おとうさん。

違うよ、違いますよ、と私はいった。

私は恩珠じゃないよ。あなたがうんじでしょ。

うんじ、おとうさん、わたし、おとうさん。

私は私よ。あなたはうんじで私はうんじじゃない。うんじは私であなは恩珠でしょう。あなたのお父さんは私のお父さんで、私は私で、私はエスじゃない。エスの娘ではない。エスのおとうさんじゃない。ああ、ああ、こんなに真っ暗。どうするのよ。

大きな温かい手のひらが私の頬の涙を拭った。私は顔の前にある柔らかい塊を両手でしゃにむに叩いた。首筋から尻まで、背中をすうっと毛並みに沿って撫でられた。

もう何も見えない。（傍点引用者）

「私」が「恩珠」＝「うんじ」だという女の言表は、読者にも諒解されていたはずの「私」＝「日本人」という同一性を宙吊りにする。「パクの墓」にとりすがり絶叫する女は、「パク」の死を悼んでいるのか、それとも墓に列せられた者たちのために泣いているのか判然としないが、「無限に続くように思われ」る「歌」と大音声の号泣の繰り返しは、「私」に強い動揺を与える。「あなたはうんじで私はうんじじゃない。うんじは私であなたは恩珠でしょう」と、最早誰なのかわからない「私」は発話するが、「顔の前にある柔らかい塊」に包まれるように、「何も見えな」くなる。「私」は「柔らかい塊」に対して攻撃性を見せるが、「私よりずっと強い」ところのものであるそれは、「私」の涙を拭い撫でさする。

忘却していたこととともに回帰し、「あうち側」にある記憶の「墓」へと「私」を導いた「恩珠」の名は、「私」を意味していた。つまり、「私」が「恩珠」だと考えた女は存在せず、「私」こそが「恩珠」なのだというこの結末は、〈幽霊〉のテーマを提示する。不意に訪れた女は、忘却された名の並ぶ「畜生墓」の前で慟哭を「無限に」繰り返し、「私」が忘れた何事かを訴え続ける。言語の通じない他者であるところの女は、「私」とともに歩行＝彷徨をするうちに境界を越え、ともに汚れ、その女を意味するものであったはずの「恩珠」＝「うんじ」が「私」なのだと告げる。この結末において、いるのにいないモノ・いないのにいるモノである〈幽霊〉的存在とはむしろ、記憶の再来とともに「日本人」としてのアイデンティティの瓦解に直面する「私」である。他方、「恩珠」であったはずの女は分身的な性質を帯びる。忘却され朽ちた「畜生墓」——共同体から境界の向こう側へと隔絶された場所——で、慟哭しながら「私」を責め立て記憶を呼び起こす「柔らかい塊」が、「私」を「うんじ」と名指すことの意味を考えれば、ここに〈汚物・糞〉のテーマが浮かび上がってくる。ともに汚れ、境界を越えた〈分身〉。「黒い塊」あるいは「柔らかい塊」であるところのそれは、「私」の自己同一性を解体しながら、「私よりずっと強い」ものとして「頬の涙を拭」いもする。「うんじ」は幼児語の糞であるところの「うんち」を強く喚起しているのである¹²。自分と深い関わりがありながら、厄介払いされる存在。べたべたとまとわりついて離れず、何か「済まない」問題を絶えず思い起こさせるもの。そのようなものとしての〈汚物・糞〉に着目した時、小説「恩珠」の展開は「終りのない夜」にも類似する。

墓に刻まれた名が示す暴力の問題に立ち戻ろう。「私」のもとに再来した〈幽霊〉あるいは「私」の〈分身〉的な女は、杭に刻まれた名を読み上げるよう「私」に命じ、「パクの墓」にとりすがり号泣する。この墓が、いかなる歴史的事象に接続できるかということの手がかりはテキスト中にはない。忘れていた他者が突然押しかけて来て、さらに忘却された記憶を思い出すよう迫る。その過程と結末において、「私」は自分自身が何者かわからない他者（「うんじ」＝「うんち」）である可能性に突き当たる。すなわち、山奥で朽ちながら黒く林立する「杭」の意味するものと同じく、できるなら済んだことにして忘れてしまいたいものに、「私」は否応なしに関係づけられてしまうのである。

「引揚げ」が「同胞」の受難に回収される脆弱性を持った言葉であることは既に述べた。「引揚げ」を「棄民」の物語として語った時、その背後にはやはり「日本人」の被害というナショナルヒストリーもまた立ち現れてしまう。この文脈に、記憶の問題に臨む吉田のテキストを置いた時、それが示すのは決して「日本人」の被害であるとは言えない。「恩珠」は、「日本人ではない」他者への暴力が忘却され、記憶が廃棄されていること自体を暴き、同時に均質で単一の「日本人」という虚構の解体へと向かうテキストとして考えることができるのである。〈幽霊〉のように再来し「私」に何事か

を求め、〈汚物・糞〉のごとく未済の問題を喚起しながら「私」との境界を融解するモノ。〈幽霊〉であると同時に〈汚物・糞〉の性質を持った存在が、「恩珠」だと言えるだろう。

6. 結び

本稿ではまず「終りのない夜」における〈汚物・糞〉と〈幽霊〉を論じた。払うあてのない「紙幣」を指で確かめながら無限に続く夜を彷徨う「私」は、自分の未来の姿を自称する「老婆」に出くわす。「私」は「老婆」を自分だと認めざるを得ず、攻撃性を向ける。「私」にとって「老婆」は「余分すぎ」ず、「私なしには存在できない」未来の姿であるところの相手は「私のウンコだ」というわけである。いつまでも済んだ／澄んだことにはならず、追いかけてくるどころか、こちらの未来に常に姿を現す「ウンコ」。その分身としての性質は〈幽霊〉に通ずる。いるのにいない・いないのにいるモノである「老婆」は、絶えず未来へ進むよう「私」に要求する。「私」は終わりのない彷徨を続けねばならない。次いで「引揚者収容所」を分析した。自他の糞尿を直視せざるを得ない、身体の負性を押しつけられた環境で「私」たちは「引揚船」を待つことを余儀なくされている。汚物を排泄する他者の身体への凝視によって、「私」は自らをも汚れた存在として見出す。「私」を非難する〈幽霊〉は、「私」を終わりのない記憶の反芻へと導く。〈汚物・糞〉と〈幽霊〉は、自己と他者、生と死、現在と過去の境界を曖昧にし、「私」を宙吊り状態に置くのである。本来あちら側にあるべき両者の出現は、こちら側の秩序を問う契機となる。

続いて「引揚げ」の体験・記憶を語る吉田のテキストにも、〈汚物・糞〉が見られることを確認した。汚ない者として扱われ、自らを余計者・厄介者と見做すこととなった吉田の体験＝「傷口」は、「棄民」を植民地へと移住させた帝国の拡大戦略および敗戦後のその処理と無関係ではありえない（「今も傷口はふさがっていない」）。幼少時から軍人であった父の都合で帝国植民地を転々とし、敗戦後は「引揚者」となった吉田が繰り返し描く「いるべき場所のなさ」の主題もまた、このことと無縁ではないだろう。ここに、あてもない彷徨を続ける居場所のない存在である〈幽霊〉のテーマを見出すことができる。いるべきではない場所・時に現出していると認識されたのち、幽霊は幽霊となる（「幽霊の弁」）。共同体の物語として流通し消費される「時代劇」＝ナショナルヒストリーから、追体験の主体である者は疎外され、自らを「幽霊」として見出すのである。「棄民」としての側面を持つ「引揚者」は、国民国家の共同的記憶からの忘却を蒙る〈幽霊〉的存在ともなる。しかし、吉田の文学から読み取るべきは、被害者としての「引揚者」の記憶だけではない。そのことを端的に示すテキストが小説「恩珠」である。「日本人ではない」他者が、「私」に不快感を与えながら再来し、忘却され朽ちた「畜生墓」にまで「私」を連れて行く。そこで「私」は、動物たちに列せられた他者の名に直面するとともに、自分もまた「日本人ではない」者——「うんじ」は容易に「うんち」を喚起させる——である、という訴えを、「柔らかな塊」となった他者から突きつけられる。「恩珠」とは、再来する〈幽霊〉であると同時に、共同体から未了のまま排除された問題としての〈汚物・糞〉でもある。

吉田の文学においては〈汚物・糞〉また〈幽霊〉のテーマに着目することによって、戦争や「引揚げ」にかかわる記憶の抑圧や、その回帰・再来を読むことが可能になる。一見「引揚げ」や「戦後」と関係のないように見える吉田の小説には、〈汚物・糞〉や〈幽霊〉を介して現れる記憶の問題が含まれているからである。済んだ／澄んだことにしたいと思いつつも、常に「私」を追いかけて、それどころか「私」の分身的存在ともなる〈汚物・糞〉。吉田の小説にとってこれは常に未了の問題であ

り続けている。同時に、未了であるにもかかわらず存在しないもの・済んだことにされ、忘却を蒙る〈幽霊〉たちの存在も、吉田のテキストには散見される。「いるべき場所のなさ」を感じながら彷徨する存在は、どこにいても余計者・厄介者であると同時に、共同体にとっては忘れてしまいたい・なかったことにしたい存在である。この意味で〈汚物・糞〉と〈幽霊〉のテーマは強い親近性を持ち、吉田のテキストにおいて結びついている。

自らの体験を消化し、それを済んだことのように語るのは容易なことではない。同時に、済んだこととして扱うことの問題も浮上する。吉田の文学に関して言えば、「引揚げ」や戦争にかかわる記述のみをテキストから切り離し、それを歴史的な物語へと嵌め込もうとした時、テキストの持つ固有の問題意識は捨象され忘却されることになるだろう。汚物にまみれ、境界を踏み越え、言葉の通じない幽霊的な他者が投げかける言葉によって、「私」が解体される。吉田のテキストが作り出すのはそのような境位である。国民国家の時間から排除された残余というべき存在が、吉田のテキストにおいては糞や幽霊として回帰し続けている。

謝辞

本稿は 2023 年度言語態研究会交流会第 2 回「セイメイタイ」（zoom 開催）での発表に基づくものです。ご意見をいただいた皆様に感謝申し上げます。

註

- ¹ 久保田裕子は 90 年代の吉田の創作を「新たな転換点」として意味づけ、とりわけ「お供え」（1991 年『海燕』7 月号）の「境界の解体する世界を存在論的な不安と共に描く方法」が「小説表現の枠組み自体を問い直す方向へと結実し、九〇年代以降の吉田の新たな可能性を示唆する作品となつ」としていると論じる（『新編日本女性文学全集』第 9 巻、六花出版、2019 年、505 頁）。また久保田は吉田の作品が「同人誌の時代から戦後文学の課題と方法を継承しつつ、ポスト戦後文学と言えるような実験的な表現の可能性へと向かうことになった」として、その連続性に言及している。しかし具体的な分析はなく、吉田の文学における「表現の枠組み自体を問い直す方向」性や「実験的な表現の可能性」の分析は、これからの研究・批評の課題として挙げられる。
- ² 「引揚げ／送還という呼称は、国民国家を規範的単位とする戦後国際秩序の形成という観点から、この移動に“あるべき場所”への移動という意味を与えることになったといえよう。」（塩出浩之『越境者の政治史』、名古屋大学出版会、2015 年、410 頁）
- ³ 『フロイト全集 9』所収、道籐泰三訳、岩波書店、2007 年、284-285 頁。
- ⁴ 北山修『新版 心の消化と排出』、作品社、2018 年、212-213 頁。
- ⁵ 佐藤豊治「樺太での終戦、引揚げ、引揚げ後の開拓の労苦」（<https://www.heiwakinen.go.jp/library/shiryokan-hikiage03/>）最終閲覧日:2025 年 1 月 6 日。なお、『引揚げと援護三十年の歩み』の収容所に関する記述は以下のとおりである。「ソ連領の収容所は居住施設の多くは粗悪で、これに多数の人員が収容され、暖房設備及び燃料も不十分のまま、零下三、四十度の越冬生活を続け、加えて衣服類は入ソの際着用又は携行したもののみで、十分な防寒設備はなく、さらに、食糧は量、質ともにはなはだしく不足し、油気のないスープ、こうりやん等雑穀のかゆ、馬鈴薯等が通常の主食で、時に魚、肉、黒パン等が与えられるにとどまり、健康を維

持する最小限のカロリーの摂取さえ困難な状況であった。」(厚生省援護局『引揚げと援護三十年の歩み』、ぎょうせい、1978年、96頁) 下線は引用者による。この記述には「収容所」における植民者たちの経験を「同胞」一般の受難として表現しようとする傾向が見られる。

- ⁶ 排泄する身体を前景化する「引揚げ」関連小説の一例として、三木卓の「曠野」(『砲撃のあとで』所収、集英社、1973年。初出時のタイトルは「曠野で」であり、1972年季刊『すばる』7号に掲載されている)を挙げておきたい。満州と樺太では状況が異なるものの、身体の負性が制御できないものとして現出する点で「引揚げ者収容所」との共通性が見出せる。
- ⁷ 金塚貞文『人工身体論』、青弓社、1990年、12頁。
- ⁸ 朴裕河『引揚げ文学論序説』、人文書院、2016年、94-95頁。
- ⁹ 厚生省援護局『引揚げと援護三十年の歩み』、ぎょうせい、1978年、128頁、「(二) 検疫」より。
- ¹⁰ 代表例としては『お供え』(1993年、福武書店)所収の作品群や、「オトヤさま」(1998年、『文學界』8月号)などが挙げられる。
- ¹¹ 単行本所収の「恩珠」には細部の言い回しへの修正が散見されるため、現時点での決定稿と見なし、これを分析に使用した。
- ¹² 「恩珠」が「ウンジュ」ではなく「うんじ」と記述され続けることの意味もここに見出せる。